

# 交論

## 近づくクマとの距離 安全教育を

—近年、クマによる人身被害が増えています。今年はどうなりそうですか。

「クマの大量出沒は20年ほど前から繰り返し起きていて、決して新しい現象ではありません。ドングリなどの堅果類が数年に一度不作・凶作になるために、餌不足となったクマが人の生活圏に出てきます」

「ただ2023年から、一気に出沒数が拡大しています。さらに昨年は市街地により入り込んできた。27年に再び大量出沒が起きると一部で予測されていますが、今年もすでに活発化しており、引き続き、警戒し

クマが入り込むようになった。クマに加え、動物が媒介する感染症といった社会活動への影響も大。自然界の「隣人」がもたらすはどうか向き合えばいいのか。

野生動物管理研究者

さくらい 良さん

1985年生まれ。立命館大学政策科学部教授。米国フロリダ大学大学院自然資源・環境研究科で学際的生態学を専攻して博士に。



ていく必要があります」

—異変の背景にはなにがあるのでしょうか。

「二つの理由が挙げられます。まずは個体数の増加です。北海道のヒグマは、ここ30年間で2倍以上に増加したと言われています。本州のツキノワグマも多く

の地域で増加傾向にあると言われています。社会的に保護ありきの政策がとられてきた歴史があり、多くの地域でクマの狩猟が制限されてきたことも、個体数増加の要因に挙げられます」

—残る二つの理由も教えてください。

「もう一つは先ほど話した餌不足です。そして二つ目が人間社会の変化です。少子高齢化・過疎化で地方の集落が消滅しています。農作地も耕作放棄地となり、クマの生息地が広がってきています」

—では、どうすればいいのでしょうか。

「短期的には、市街地に出ているクマは捕獲するしかありません。中長期的には、個体数を管理することです。先進事例として挙げられる兵庫県は20年ほど前に研究施設を立ち上げ、クマをモニタリングして、その増加数に応じて、捕獲するなど個体数管理を

とクマとのすみ分け。個体数管理とともに、これらていくことも一つです。これは本来、行政が主導すべきです。しかし、行政の予算やマンパワーには限りがある。だからこそ住民の理解と協力が欠かせません」

—むしろ住民にできることは限られませんか。

「個体数を管理できたとしても、地域住民が庭に植えている柿や栗などの木を放置していたら、クマはまた寄ってきます。だからこそ住民の行動や意識が変わらないと、問題は解決できません。つまり野生動物を管理するには、人間に働きかける必要があるのです」

「兵庫県では10年に大量出沒が起きていましたが、

